寄生愛者

平　龍生

1

「悠子さんの場合は、雅紀くんとは便宜的同棲、元々愛があってというわけじゃないんだもの。男と女が一緒に暮らすって、ずっと、セックスレス状態なんて、ない話じゃないけど、少し不自然ね。何だか、これ、心が寒くなるような話だわ。悠子さんの失恋後遺症を治してあげようと思って、わたしが手を貸したのが、この話のそもそもの初めだったのに」

「そんなこと言われても。いろいろあるのよ。雅紀くんのことについては。美里には言いたくないこともあるの」

津島悠子はあとは言葉を濁した。

ホテルの一階にあるコーヒーラウンジの窓際の席で、二人は午後のひとときを過ごしていた。

一枚ガラスの 向こうには、小さな植え込みと、灰墨色の空が望めた。

時折り、吹き抜ける風が、植え込みの針葉樹の枝を揺すって通る。どこかに春の気色は閉じ込められたまま芝生の緑も半ばは枯れているように見えた。

東山雅紀と津島悠子が同居を始めて、四ヵ月が経過していた。森野里美が口にした通り、二人が同じマンションで暮らすようになったのは悠子の失恋話が契機となっていた。

当時の相手の男、妻子のある中館啓司との間で妊娠騒ぎがあり、悠子は子供を生む決心をしたが、中館啓司が同意せず、話し合いを続けている内に、心労も重なり悠子は流産した。

あげくに、不倫相手の本心も知ったことで、その後、悠子は男性不信症に陥った。

そんな時、福岡から上京して来たばかりの雅紀を里美から悠子は紹介された。里美とは高校の時のクラスメートという触れ込み、男女の仲はお互い次第という曖昧な関係でこの話は成立した。

サラ金の借金がかさんでの夜逃げ同然の異郷暮らし、何か雅紀には危ういものを感じたが、結局、雅紀と一緒に住むことに悠子は同意した。

別れたつもりの中館が、節操もなく、悠子の住まいに顔を出し、その仲を清算できない状況に悠子は置かれていた。雅紀とは他人同士なのに、住まいを移す気になったのも、中館とのこの腐れ縁と縁を切りたい思いがあってのことだった。

それに、新しい住まいの必要経費の一部を、里美が負担したりもしたので、つい、この話に同意してしまったという経緯もあった。この限りではこの話には、悠子は里美には借りがあることになる。

「ね、もう、春の足音も耳にしているっていうのに、今日は寒そう。こんな話をしているとお誂え向きのように、小雪が舞い始めたようよ。あれって雪じゃない？だったら、あれ、風花（かざはな）ってことになるのかな。そうそう、セックスレスカップルの人たちのことをね。風花症候群（かざはなシンドローム）って、言うんだって。悠子さん、知っている？」

里美がしたり顔になり言った。

「何よ。そのかざはなシンドロームって」

煩杖をつき、少し、きつい視線で里美を見返す。

「春だって言うのに、山の向こうは大雪、そんな時、強い寒風が吹くと、小雪とかが、こちらは晴れているのに、風に吹き寄せられてちらちらと降ることがある

じゃない。それもひとところだけ。その現象のことを、風の花と書いて、かざはなと読むのよ」

窓の外では強い風が舞っていた。針葉樹の枝々が天を刺すように風に煽られていた。気まぐれ風が、いっとき、空のどこかから、不意に、訪れたようだった。

「それって空は晴れているのに通り雨がぱらつくあの狐の嫁入りの話みたいだわ」

その話に悠子はひとまず関心を寄せた。

「あれ、日照り雨ともいうんだよね。でもさ、かざはなって言うのはもっと寒々とした風景なの。そうね、悠子さんと雅紀くんの関係も、男と女の話としては、何か、冷え冷えとしていてこの話と似ていない？二人とも同居生活をしているのに、未だに、お互いに興味示さないって、セックスレス症そのものっていうか」

むしろ楽しむ口調で里美は言った。

里美は二人が同居する前に、

「お互いがその気になれば抱き合ってもいいのよ。悠子さんの男性不信症も治ることだし」

と、悠子の耳にささやいたことがあった。

その限りでは、この里美の話の向け方は、嫉妬心があってのことではない。悠子は男性不信が募った末に、ほんとうにセックスレス症の傾向を持ち初めていた

。内心は、雅紀に言い寄られたらどうしようと、用心しているようなところもあった。
里美は悠子より四つ下の二十一歳、顔立ちも目鼻のつくりがはっきりしていて、自己主張の強そうな女に見える。それにひきかえ、悠子は細面のせいもあったが、顔の造作もすべて小造りで、おとなしそうな印象を受けた。
（里美はわたしに何を伝えたいのかしら？雅紀とわたしの仲を探りたくて、わざわざ、この場にわたしを呼び出したってこと？）
不審の思いを抱いたまま、悠子は里美に不審の思いを抱いた。

2

「ね。今度はわたしの話を聞いてよ。わたしの暮らしぶり、派手になったと思わない？」
急に、里美は話題を変えた。
「金まわりがいいっていう意味で？」
「そう、わたしね。面白い男を捕まえたんだ。いや、正確に言えば、捕まえられたってことかな」
「捕まえられたって？」

「そうね。捕まえたっていうより、捕まえられたほうかな。四十一歳で独身、資産家、わたしをほんとうの意味で楽しませてくれそうな男。それにさ、援助交際ありのおいしい話なのよね」

「…それってウリ？」

「やだな。そういう関係なしってこともあるんだから。抱き合う時だって、愛し合っていれば、これ、純粋な仲じゃなくて。うまいのよ。カレ。魂まで揺さぶられているの、わたし。もう、凄いポルノ小説が書けそう。テレビ向きじゃないから、シナリオにできないのは残念だけど」

里美はテレビの脚本を書きたいという夢を持っていた。言葉使いなどに、一種の癖があるのは、里美が偽悪者ぶっているところが多分にあるからだった。

悠子が里美と知り合ったのは、テレビドラマの撮影現場でのこと。ヘアーメイクの仕事をしている悠子と、シナリオライター養成講座の現場研修に参加した里美との取り合わせが二人を近づけることになった。

自分の夢を叶えるための人脈を、里美はその後も着々と整えつつあるようだった。放送局や制作プロダクションの連中とも知り合い、すでに、その内の何人かとは交流もあるようだった。

里美が口にした中年男もその関係者の一人かも知れなかった。
「その男の人が風花のことを口にしたの？」
「そうよ。カレ、テレビドラマにできたらいいなっで言っていたわ。セックスレスシンドロームって、何も悠子さんのような若いカップルだけじゃなくて、十代の若者たち、それに新婚夫婦から、熟年夫婦まで、かなり深刻な症例もあるみたいよ」
「わたしたち、深刻ってわけじゃないわ。あくまで便宜的同居よ。雅紀くんて、四つ、年下なのに若者らしさがなくて。それに変な癖もあるみたいだし…。わたしが浴室にいる時なんか、外から様子を窺っているみたいで、わたしの気のせいか知れないけど。ほんと、そういうのって嫌だと思わない？まるで覗きに遭っているようで。それにね。他にも変なことがあって…」
「他にも、変なことって？」
「いろいろよ」大様、そんな会話を二人交わした。
「危ない。危ない。雅紀くん、結構、へんたいやってんだあ。もしかして、雅紀くんもセツクスレスシンドロームの気あり？妙な取り合わせになったものね。あの子、わたしには性欲は感じないとか言って。ね、失礼しちゃうわよね」

「わたしになら感じるっていうの？」
それからも、くどくどと、この会話は続いた。
「さあね。それは雅紀に聞いてよ。一つだけ、わたし、あの男のへんたいぶり紹介しておこうか。初めての時、カレったら、自分は見学者になって、わたしにオナニーをさせたんだ。なぜか分かる？へんたい大嫌いだもんね。裕子さんは」
「どうだか…」
「一人ひとり、女はああして欲しい、こうして欲しいって愛撫のされ方って違うよね。ある人には快感でも、他の人には苦痛のケースもあるってのがカレの持論なの。カレはセックス相手の好み具合を、相手にオナニーさせて学んだりもするわ。強弱とかタッチ、指の動かし方とかいろいろ、女性の好みの触れ方、これ大事にことよね。そう、最高のセックスをするための事前チェックも怠りなしよ」
したり顔になり、なお、里美が言った。
「前戯のプレイのお陰で、わたしはまあ、初めての時から、めくるめく体験をしたってわけ」
その話の続きも里美は加えて見せた。
「どうでもいいわ。他の人のことって」
「悠子さんのそういう言い方が、自分を寒くしちゃう

のよ。そうは思わない？肌の冷たい女って、それ、春が来ても、春らしいファッションに無関心な人のことでしょ。悠子さんも、少しは春めいた女にならなくちゃ。わたしはそう思うの」

「…そういう言い方もあるってことね」

さすがに、念を押されて、悠子は気分を害し、険を含んだもの言いになった。

この日の悠子は、淡いパーマ・バイオレットの絹地のワンピース、それに、ベビーピンクの細かい織りのカシュクールを、ふわっと肩から羽織っていた。

春を先取りしたファッションで身を飾っているつもりだったのに、この里美の突き放した言い方に、悠子は、悠子はしばらく黙り込んだ。

「ね、すっごい体験しなくちゃ、人生つまんないわよ。わたしのカレを貸してあげようか。セックスレス女性用、いや不感症の女性用かもね。カレの希望だと、悠子さんのマンションのベッドで抱き合うのがいちばんいいなって、セックスレスは日常的な光景の一つだから、気取らずに、食事を摂るように体を合わせたいっていうの」

「ずいぶんと失礼な話ね。わたしは言っておくけど、不感症なんかじゃなくてよ。たくさんよ。そういう話は。

わずらわしいことだわ」
「それで安心したわ。でもね。人間は脳の大部分をほとんど使わずに死ぬって言うじゃない。女の体も同じ、最高のオルガスムスを知らずに死ぬ女が、この世では、九十パーセント以上にもなるんだって。これも、全身が寒くなるような話だとは思わない？」
里美はコーヒーカップの端をなめるようにし、冷めかけたコーヒーを啜った。
口紅がカップの縁に残された。
「いいわね。里美はいい男に恵まれて」
「ね。今度、わたしとカレが抱き合うところを、悠子さんに見せて上げたいな。マジな話よ。わたしはまだ表現力不足、とてものこと、あのすばらしさを、自分の言葉で語ることって出来そうにないの」
口元に薄い笑みさえ里美は浮べていた。
夕方から、撮影スタジオに入る仕事があると偽り、悠子は席を立った。
里美は、あと三十分もすれば件（くだん）の男がこの場にやって来るから待つように悠子に言ったが、悠子は逃げるようにしてホテルのラウンジを後にした。
とても寒い。つむじ風が外では舞っていた。
灰色の空を見上げたが、雪片のようなものは、もう、

舞っていなかった。ひとわたり、道行く人のファッションに悠子は気を配った。春めいた色が暖かな花を咲かせていた。やっと、悠子は自分を取り戻した。

3

ホテルのラウンジで、里美と会った日から一週間が経過していた。外出先から帰って来た悠子は、自分の部屋の様子が違っていることに気づいた。

「何か、変よね。誰かが、わたしのベッドに？」

ベッドの一部が乱れていた。前にも、このようなことがあった。フリーターの雅紀との同居生活は時間的なずれが多く、雅紀が悠子の部屋に出入りする自由は常にあった。

（また、雅紀が何のつもりか、勝手に、わたしのベッドを乱した…）

悠子は嫌な思いに囚われた。

いまもって、悠子を女とは認めていないのか、雅紀は余り口もきかず、まったくの他人顔で、これまで悠子と一緒に暮らしていた。

その点では、悠子も同居者としては楽だったが、雅紀の変な癖には薄気味の悪さがつきまとい、悠子は嫌

な思いを持ち続けてきた。
やや小太り気味で、男の癖に雅紀は色が白い。
のそっとした歩き方で、無口、見様によれば、オタクの典型のようなタイプの若者だと言えた。
そもそも悠子が雅紀に嫌悪感を持ったのは、雅紀の妙な癖に気づいたからだった。
―同居を始めた頃のことである―
その日は、朝早く仕事に出掛けたので、悠子は夕刻に帰宅、溜まっていた洗濯物を手にした。
その時、洗う前の自分の下着が濡れていた。
明らかに、それは男の射精物だった。
親切気もあって、雅紀の下着を洗濯してやったこともあった。これも変なことの一つだったが、雅紀の下着に口紅が附着していた。
悠子が唇に塗るものを、雅紀は男のしるしに塗りたくり、何か、夢想に耽ったのだろうか？
「わたしがセックスレス症の女？それは、わたしの側の問題じゃなくて、これは雅紀自身に問題があるってことでしょう。わたしは確かに男性不信症よ。それは認めるとして、こんな相手と同居していたんじゃ、ますます、わたし、男嫌いになってしまうわ」
悠子はぼそりとつぶやいた。

一人暮らしの女性の部屋に留守中に入り込み、淫らな行為を果たしていく変質者？その男に、家賃の一部を負担してもらい、便宜的な同居をしている自分のその暮らしぶりのことも、悠子は嫌になった。あれこれと愚痴を里美にこぼす前に、悠子は転居すべく、不動産屋を何軒か訪ね、適当な物件をすでに当たっていた。

「いやなことだわ。あの男の薄気味の悪い行為のために、わたしのベッドが使われているなんて」

歪んだ夢想に耽っている雅紀の姿を想像したら、途端に、背筋に寒気が走った。

ベッドの白いシーツと布団カバーを悠子が剥がし、枕カバーも一緒に取り換えた。

枕元のサイドテーブルの上に茶封筒が置かれているのに、ふと、悠子は気づいた。手に取ってみた。今月の未払いの家賃分なのか、相応の一万円札が入っていた。ベッドを乱したのが雅紀自身であることを証明するようなわざとらしいやり口だった。

と、その時、電話の呼び出し音が鳴った。

悠子は不意のことで、体をびくっと震わせた。

親子電語の子器をじっと跳めていた。

すぐには手に取る気になれなかった。

数秒の間があってから、やっと、悠子は受語器を手

にした。こちらから、応対の声は掛けなかった。このところ、何度か、無言電話があり、不審の思いを持っていたので、悠子は用心したのであった。

悠子は相手の息遣いを窺った。やはり、無言電話だった。何秒間のことか、間があり、電話は向こうが切った。無言電話はこれで四回目になる。雅紀の居所を追う借金取りの連中が、所在を確かめようとして電話をよこしたのかと考えたこともあったが、それにしては、相手は姿を現すわけでもなかった。

雅紀がいない時に、この無言電話が掛かるのも不審な点ではあった。

悠子は不安な思いのまま、何気なく窓際に寄った。マンションニ階の部屋からは小さな三角公園が見通せる。その角に二台の電話ボックスがあった。

薄暗い夕闇がたち込め始めていたので、よくは見えなかったが、つばの短いハーバー・キャップをかぶった男が一人、電話ボックスからのそりと出て来た、心なしか、マンションの建物に目をやったようだった。背格好は雅紀に似ていた。悠子にはそのように見えた。

「雅紀が自分の住むマンションにわざわざ電話をするなんてことは考えられないし。気のせいよね。わたしには関係のない見知らぬ他人よ。きっと。あの人は」

悠子は独り言を口にした。
風だけは今日も強かった。気象情報によると、日本海沿岸部には春の大雪が降っているようだった。
悠子は砂嵐の舞う三角公園をぼんやりと跳めていた。男の姿はもう見当たらなかった。

4

「その手の被害に遭ったことがわたしもあるのよ。見知らぬ男に待ち伏せされて、それに、家の回りもうろつかれたわ。ストーカーってやつね。でも、わたしは悠子さんとは違って、自分の意志をはっきりと相手に言う方だから、自分でちゃんと決着はつけたんだ」
「どんなふうに？」
悠子は電話口の向こうの里美に問い掛けた。
無言電話があったあと、不安な思いになり、悠子は里美に事の次第を打ち明けた。
「その男の前に進み出て、わたしのあとをつけないで下きいと大声で言ったのよ。駅でのことだったから、周りには人もいたわ。それから、借りていたアパートはその後引っ越したの。利用する私鉄駅も変わったこ

とで、わたし、その男とは接触しなくなった。わたしの勤め先が決まっているわけじゃないから、相手もそれ以上はね」
「いつ頃のことなの？それって」
「うん？半年ほど前かな」
「じゃあ。雅紀とわたしが同居生活を始めた頃と、それ、同じじゃなくて」
「そうね。でも関係ないよ、雅紀とは。わたしが住まいを変えたあとに、雅紀は上京して来たんだから。それにわたしの部屋は狭いから一緒に住むのは無理だし。なあーんだ。悠子さん、その無言電話の主は雅紀と疑っているわけ？もしかしたら、悠子さんが別れた昔の恋人、中館さんていう人かも知れないし」
「あの人が…。でも、彼はここの住所は知らないはずよ。有り得ない話だわ。さっき見た帽子をかぶった男の人、薄暗かったから、誰とはっきり分かったわけじゃないけど」
「疑心暗鬼ってやつよ。雅紀がそこまでするとはね。別に変質者が悠子さんの周りに出没しているってわけじゃないんでしょ。それって考え過ぎよ」
「でも、雅紀くんも変よね。一緒に住んでから、週に一度ぐらいしかここには帰って来ないんだから。それ

なのに、わたしの居ない時を見計って、家には帰って来るようでもあるし。まるで、わたしを避けているみたい」

「悠子さん、引っ越しを予定しているんでしょ。早く出ちゃいなさいよ、そんなマンション。気味が悪いと思うなら、雅紀くんとも縁を切ればいいんだから。いい機会じゃなくて」

「出るにしても、雅紀くんの荷物もあるし、一応は話をつけてからよ」

「このところ顔も見ていないのよ」

「いいわよ。一方的で。彼の荷物なら、わたしが預かるわ。元々、雅紀のこと、無理をして頼んだのはわたしだし。あとのごたごた、何かあっても、わたしが処理するわ。二人とも、別々のところに引っ越しすれば済むことじゃない」

「だから、その気でさ、不動産屋には、もう話しはしてあるわ」

「それで、一件落着じゃない。それはそうとわたしのカレ、悠子さんにすっごく興味あるみたいよ。この前、悠子さんに会った時のことだけど、ホテルのコーヒーラウンジを出たところで、悠子さんらしい女性に出会ったみたいよ。カレ、スリムな体型の女性が好み。まだ

、悠子さんは女になっていないような稚なさがあって、心そそられるって、カレ、アブナイことも口にしていたわよ」
「わたしに会った？その人が…」
「ええ、ペビーピンクのカシュククールを着た女性って言ったから、間違いないと思う」
「そちらの話はなしにして、男性不信症の上に、男性恐怖症にだってなりそうよ。わたし。しばらくはいいわ。男の人と付き合うのは」
「そんなことを言っているから風花症候群（セックスレス・シンドローム）が進行するのよ。それに、ストーカー恐怖症？悠子さん、春先はいろいろ心の病いが芽吹く時だっていうけど、用心しなくちゃね。ちょっと重症じゃない？そんな気持ちのまま過ごしていると、わたしが書こうと思っているシナリオの女主人公にされちゃうかもよ」
「…いやよ。そんなの」
「ね、ね、電話だから言えることだけど、わたし、今日の午後、また、めくるめく女になっていたのよ。話を聞かせてあげたいな」
　里美の声は少しうわずっていた。断りを入れる前に、里美がまたのろけ話を口にした。

「カレの舌はね、とっても柔らかくて気持ちいいの。ふふ、わたしのアソコ、いとおしそうに食べちゃうって感じかな」
「だから何？」
「そんなにとんがってちゃ。よくないと思うけどな。ほんとうに気持ちいいんだって。クリちゃんでイク時なんか、もう、アソコ、びくびくっと来ているのに、うまく焦らされて、舌でちろちろ舐められるの。イクって感じで、十数秒はそのままよ。それで、一気に電気ショック状態、小さな雷が落ちるって感じね」
「いつもそんな話ばかりね」
「だから、悠子さんにカレを貸してあげるって言ったじゃない。その時のすばらしさを知ってもらおうと思って話をしているのに」
「わたしに貸すって、その話も何だか変よね」
「そうかな。余り、一人の男にわたし固執したくない主義なのよ。向こうにだって、こだわられても困るし。ああ、違う、違う。元は言えば、悠子さんの〝セックスレス症〟を治してあげたいうところから、この話は出発しているんじゃない」
「だから、それは時間が掛かることだし。男性不信っていうのは、結局は、わたしが自分の力で解決するし

かないことなのよ」
「わかったわ。その通りよ。ああ、それから、転居先が決まったら教えて。そちらにはよりつかないみたいだけど、雅紀はわたしのところには時々は電話してくるのよ」里美の方から電話は切った。
この夜、寝る前に、シャワーを浴びようと思い、浴室に入ったら、また、異変が起きていた。
「何よ、これって？」
悠子は唇を震わせた。浴室の入り口の擦りガラスは、外からは透けて見えるので、目隠し用のビニール製のカーテンが、扉には巡らせてあった。そのカーテンがかみそりのようなもので、ずたずたに切り裂かれていた。この部屋に入れるのは雅紀しかいない？
「こんなことまでするなんて、何のつもり？やっと、あの男本性をさらけ出したようね」
気丈な文句を口にしたが、その声はかすれていた。悠子は眼を見開き、半ば口を開けた状態のまま、しばらく、その場に立ちつくしていた。やっと、自分が素っ裸であることに気づいた。
「いやーっ」と、悠子は思いっ切り叫んだ。
悲鳴だった。浴室の狭い空間で、すでに悠子はのど元に、かみそりを突き付けられているようなものだった。

た。影もない誰かが、どこかに潜んでいる？そんな思いに打ち震えながら、悠子はタイルの上に、いつまでも、しゃがみ込んでいた。

5

鬱陶しい思いのまま、悠子は数日を打ち過ごした。その間、足繁く、不動産屋に通った。やっと、悠子は恰好の物件を見つけ、引っ越しをすることができた。

自分の住む環境を変えることでしか、この場合は難を逃れる方法はなかった。

まだ、引っ越し荷物の片付けはできていず、マンションの部屋の中は殺風景なままだったが、それでも悠子は少し落ち着きを取り戻した。

朝、目覚めた時、小鳥の声を聴いた。郊外地を選んだので、空気もおいしく感じられた。テラスの向こう側は、こんもりした森になっていたので、芽吹いた樹木の緑を目にするだけでも悠子の心は和んだ。

一連の出来事については、すべて、里美に話をした。

引っ越し先もその時に告げた。

結局のところ、悠子の心胆を寒からしめた犯人については言及せぬままに終わった。誰と言わずとも、分

かる設定ではあった。雅紀の荷物はみんな里美が引き取った。そのような協力の仕方をすることで、里美は悠子への借りを返したようだった。

ワンルームマンションなので、手狭だったが、やっと、独り暮らしの時間を得たことで、悠子は心の余裕を取り戻した。

引っ越しを終えて、二日目のことだった。

見知らぬ男から、悠子に電話が掛かってきた。低く圧し殺した声だった。

「津島悠子さんでしょう。どうです？今度の住まいの住み心地は？マンションのすぐ近くにある森の中はもう散歩なさいましたか？」

「…それって」

声を呑んでから、そう答えたが、受話器を持つ手がぶるぶると震えた。狙いをつけた男の声は獲物を弄んでいるのか、楽しみを含んだものだった。悠子はまだ森の中には足を踏み入れていない。それなのに、男はすでに新しい住まいの環境を承知しているようだった。すでに、獲物を手に入れている口ぶりでもあった。

「散歩してごらんなさいよ。バード・ウォッチング同好会というのがあるようで、小鳥を観察するための探鳥地が、森の中程の池のほとりには用意されていまし

てね。わたしにはバードウォッチングの趣味はありませんがね」

その口ぶりから、相手が誰なのか、すでに、悠子には見当がついていた。里美が元愛人と称しているあの中年男に違いなかった。そのことを知らせるように、次に、男は聞いたことのある文句を口にした。

「あなた、風花症候群（かざはなシンドローム）という言葉は知っているはずだよね。実は、わたしもセックスレス信奉者の一人でしてね。なぜかって言うと、男と女の行為そのものは、あれはいかにも、動物的で、およそ、人間の尊厳に欠ける行為だと、わたしはもの心ついてからというものずっとそう思い続けてきたんだ。豊かな人間としてのイメージのふくらみというものがない。津島悠子さん、あなたはそうは思いませんかね？」

「…もう、わたしは」

と、だけ悠子は言い、受話器を置こうとした。

手指にまとわりついたかのように、握り締めた受話器は手から離れなかった。

「かんじんのことをまず言っておくよ。森野里美だが、彼女もわたしのターゲットの一人だった。別の誰かをわたしに紹介すれば、それで、その女は許してやると

言うのがわたしのやり方でね。もつとも、あの女は自分で怖い語を書き上げる気になっているようだから、わたしはいいネタを提供してやったことになるがね。東山雅紀とかいう若い男からわたしは前のマンションのスペアキーを預かっていた。あんたがいない時は出入り自由ってわけだ。いまも、あんたの匂いが染みついた下着の匂いが懐かしい。どうかね。これからも、わたしに密かに愛される女になれるかな。それとも里美のように友人の女を紹介して自分だけは難を逃れる方法を選ぶのかな」

「そ、そんなこと…」

悠子はもう男の言い分を聞くまいとしていたのだが、容赦なくその囁き声が耳に入ってきた。

なお、男はしゃべり続けた。

「わたしとしてはあなたが気に入っているんだよ。自分好みの女と出会えるなんてこれは滅多にあることじゃないからね」

男はまだくどくどと、いい気な言辞を弄した。

「いや、いや…」呟きをくり返している内に、悠子は気を失った。床の上に、悠子は半身折り、前のめりに倒れこんだ。裕子の手からすべり落ちた受話器が膝の上に落ち、悠子の柔らかな腿の上に止(とど)まった。

ぶらんぶらんと受話器は揺れていた。

「さてさてとお。わたしがどんな人間か教えてやろう。いいかね。わたしは近頃、マスコミの連中がとかく話題にするストー力―という言葉が大嫌いでね。そうだろう。少しく、変質的だからって、おしなべて、ストーカーなんぞという妙な外来語で、男の真情を言い表さないで欲しいものだ。知的な男の性衝動は、それこそ、千差万別、万華鏡のように、あらゆる光りの断面を映し取っているものなんだよ。隠微な花という表現ぐらいならまだ許してやるが、現代社会の病巣のように言う。今更、問題にすることでもないのに…」

悠子はそんな男の言い分など聞いてはいなかったが、男のねっとりしたしゃべり口は変わることはなかった。方通行状態の受話器だけは、男の意志を聞き知っているかのように、不用意な姿勢でしどけなく開いた悠子の股間にそのまま置かれていた。

秘められたままのその女の股間に向けて、なお、男の卑猥な文句だけが、電話口からは漏れ出ていた。

《了》